

Way 構文の多様性と創造性について

drink one's way を中心に*

金澤俊吾

1. はじめに

英語の Way 構文は、[V one's way PP]の文法形式を用いて、主語名詞句が時間をかけて one's way PP によって表される経路の移動を表す。V の位置には、様々な動詞が生起し、**drink** もその一例である。「飲む」動作を一定の時間行うことで、主語名詞句の実体の状態変化を表し、その状態変化は、「前置詞＋名詞句」「前置詞＋形容詞句」「形容詞句」のいずれかで具現化される。本論は、Way 構文の一事例である、**drink one's way** に見られる表現の多様性と、新たな事例の創造性について考察する。

2. Way 構文に関する先行研究

Way 構文が、基本的に[V one's way PP]の文法形式によって、主語名詞句の実体の移動を表すのは、Talmy (2000) による、英語が衛星型枠組み言語 (satellite-framed language) であることと、移動動作の過程の前景化によるものとされている。米山 (2009)によると、Way 構文に生起する動詞は、意味拡張により、様態を伴う移動動詞と同様の振る舞いを示す。また、Luzondo (2014: 53)は、本来生起し得ない動詞が Way 構文に生起できるのは、「上位のメトニミー」によって動機付けられると説明している (cf. Jackendoff (1990), Goldberg (1995)など)。さらに、Rice (1988: 204)によると、自動詞が単独で文を形成する際、**drink** は容認されるのに対し、**drink** の下位語は容認されない (Hemingway drank. / *Hemingway sipped / guzzled / swigged / quaffed.)。一方、Way 構文には、**drink** の下位語が生起できる。また、飲み物を表す名詞由来の転換動詞も生起できる (cf. Clark and Clark (1979), 大室 (2018)など)。

3. 多様な drink one's way —drink one's way の五つの事例

Drink one's way によって表される状態変化は、主に健康に関する内容が多く見られる。また、当該事例には、様々な動詞、結果状態を表す句が生起する。以下、五つの事例を紹介する。第一は、[**drink one's way to NP**]の事例であり、状態変化の種類により、4 種類に下位分類される。①健康状態の改善を表す事例 (以下、用例中の太字は筆者による。 **Drink your way to better health and lasting weight loss.** (Margaret Light (2025) *Hydration and Weight Loss: Why Drinking Water Matters*)) ②感情、高揚感を得る変化を表す事例 (This materialistic philosophy is trying in vain to **drink its way to happiness**, ... (Billy Graham (2025) *Freedom from the Seven Deadly Sins*)) ③病気への変化を表す事例 (... we all just eat and **drink our way to sickness**. (Terry Cooksey (2015) *The Cure For All Disease*)) ④「死」に至る状況を表す事例 (... my grandfather [...] **drank their way to death and failure**, ... (Carolyn See (2011) *Dreaming: Hard Luck and Good Times in America*))。

第二は、[**drink one's way to AP**]の事例であり、本来結びつき得ない、前置詞 **to** と形容詞の組み合わせにより、結果状態が表されている点が特徴的である (Who wants to **drink their way to skinny?** (GloWbE))。第三は、[**drink one's way AP**]の事例であり、形容詞が生起している点では、結果構文と類似しているが、結果状態に至るまでの過程を前景化している点で、結果構文とは異なる (... and we fill it with Thunder Muscle! Tim Dempsey has an hour to **drink his way free**. (TV Corpus, 2016, US/CA))。

第四は、[V (**drink** の下位語) one's way to NP / to AP / AP]の事例であり、様々な動詞、結果句の組み合わせによって構成されている (**Sip your way to health** with super smoothies and seasonal soups. (COCA, 2013, MAG) / Ready to **sip your way to vibrant?** Let's blend this party! (Paul Sir (2025) *Blend It, Love It, Live It: Green Smoothies for a Vibrant You*) / So they snorted and smoked and **quaffed their way clear** of any of the mortal-and moral-fetters that limited most people. (Chuck Wendig (2023) *Black River Orchard: A Masterpiece of Horror from the Bestselling Author of Wanderers and the Book of Accidents*))。第五は、[V (飲み物名詞由来の転換動詞) one's way to NP / to AP]の事例である。wine (ワインを飲む) や、juice (野菜や果物をジュースにして飲む) などが生起する (How to **wine your way good health** (the book title) / **Juice your way to slim** (the book title))。

4. drink one's way の多様性と創造性

ここまでの観察に基づき、**drink one's way** の多様性と創造性に関する、三つの問いへの説明を試みる。第一の問い「なぜ、**drink one's way** は、多様な結果状態を表すことができるのか」に対し、本論は、DRINK フレームから喚起される状態を、[**drink one's way to NP / to AP / AP**]によって具現化できるためと説明する。Iwata (2020)は、Croft (2009)の EAT / DRINK のフレーム分析を援用することで、**drink** を伴う結果構文の動作と結果状態の関係を説明している。本論は、この知見を応用し、**drink one's way** は、「健康」に関わる結果状態を表す傾向が強いと考える。

具体的には、「飲む」動作の結果状態が、DRINK フレーム内の身体の生態学的領域 (biological domain) から喚起される。特に健康に関する状態は healthy drinking domain から、「死」と関連する状態は alcoholism domain から、それぞれ喚起され、その意味内容が[drink one's way to NP / to AP / AP]によって具現化されている。

第二の問い、「新たな事例[drink one's way to AP / AP]は、どのように形成されるのか」に対し、本論は、既存の構文からの類推、具体的には、[drink one's way to AP]の事例は‘go from A to B’からの類推により、[drink one's way AP]の事例は、結果構文 ‘drink oneself AP’からの類推により、それぞれ形成されると説明する。例えば、drink one's way to skinny は、‘go from chubby to skinny’から類推される。初めに、‘go from chubby’に関する情報が文脈から補完され、drink one's way への置き換えにより当該表現が形成され、「飲んで痩せ細る」に至る過程が前景化される。一方、Drink Your Way Sober (the book title) は、‘drink yourself sober’からの類推により、yourself が your way に置き換えられることで当該表現が形成され、「飲んでも酔わない」状態に至る過程が前景化される。この新たな用法の創造は、Israel (1996: 228)による「産出原理」(発話は、以前に聞いたことのあるような響きを持つべきである)と、「解釈原理」(心的表示は、実際に経験した多様な言語使用の類似性を捉える形で形成されるべきである)によって動機付けられる。また、この新しい用法の創造は、Croft and Cruse (2004: 326)による、「新しい構文は、既存の構文スキーマの事例から出現し、その後、独自の方向へと展開する」という記述とも一致している。

なお、[V one's way to AP]の事例に、本来結びつき得ない組み合わせ to AP が生起できる理由に関して、本論は、to AP が部分的にイディオム化された表現であり、形容詞と名詞の中間の属性を持っていることに起因すると説明する (cf. Quirk et al. (1985: 424n))。また、当該事例は、健康に関わる動作と結果状態との間に因果関係が構築される場合に使われる傾向が見られる。実際のところ、drink 以外にも、sweat one's way to skinny (汗をかいて痩せ細る)などの例もあり、同様の原理に基づき形成されていることが分かる。

第三の問い「drink one's way to NP / to AP / AP は、談話内でどのような関係を構築しているのか」に対し、本論は、一連の drink one's way の事例が、談話内に新たな話題を導入する機能を担うのに対し、後続する文は、「飲み続ける」動作と、結果状態に至るまでの過程を詳述する機能を担うと説明する。例えば、drink our way to sickness が談話内に導入されると、後続する文の下線部によって、食べたり、飲んだりする動作の継続が、慢性的な病気をもたらすと詳述される (以下、用例中の下線は筆者による。... we all just eat and drink our way to sickness. We refuse to face the reality that what we ate and drank that we loved so much, has brought us the result of sickness; chronic sickness. (Terry Cooksey (2015) *The Cure For All Disease*))。また、sip your way to vibrant も同様に説明できる。この表現は、本の章の見出しとして使われている。本文では、スムージーを飲むことの重要性と、スムージーを飲み続けることで「活力あふれる状態」へといかに変化できるか、そこに至るまでの状況が下線部で詳述されている (**Sip Your Way to Vibrant**. Hey, you smoothie-sipping superstar! Ready to crank up the volume on your vibe? Green smoothies aren't just drinks—they're your personal cheerleaders, pumping joy, calm, and "I've got this" energy into your busy life. Forget those wellness gurus with their smug kombucha grins. This chapter's your smoothie diary, spilling the tea (or greens) on how these blends lift your mood from "ugh, Monday" to "watch me slay." (Paul Sir (2025) *Blend It, Love It, Live It: Green Smoothies for a Vibrant You*))。

*本研究の成果の一部は、JSPS 科研費 25K04170 の助成を受けてなされている。

参考文献・コーパス

- Clark, Eve V. and Herbert H. Clark (1979) "When Nouns Surface as Verbs," *Language* 55, 767-811. / Croft, William (2009) "Connecting Frames and Constrictions: A Case Study of *Eat* and *Feed*," *Constructions and Frames* 1, 7-28. / Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago. / Israel, Michael (1996) "The *Way* Constructions Grow," ed. by Goldberg, Adele E., *Conceptual Structure, Discourse and Language*, 217-230, CSLI Publishing, Stanford. / Iwata, Seiji (2020) *English Resultatives: A Force-Recipient Account*, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia. / Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge. / Luzondo, Alba Oyón (2014) "Constraining Factors on the Family of Resultative Constructions," *Review of Cognitive Linguistics* 12, 30-63. / 大室剛志 (2018) 『ことばの基礎 2 動詞と構文』 研究社, 東京. / Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London. / Rice, Sally (1988) "Unlikely Lexical Entries," *BLS* 14, 202-212. / Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*, MIT Press, Cambridge. / 米山三明 (2009) 『意味論から見る英語の構造—移動と状態変化の表現を巡って』 開拓社, 東京.
- Corpus of Contemporary American English (COCA): <https://www.english-corpora.org/coca/>
- Global Web-Based English (GloWbE): <https://www.english-corpora.org/glowbe/>
- The TV Corpus (TV Corpus): <https://www.english-corpora.org/tv/>